

5 インタビュー集

1 篠原一氏

しのはらはじめ

篠原一氏：政治学者。

旧制第一高校を昭和19年9月卒業。その後、昭和25年に東京大学法学部政治学科を卒業。

現在、東京大学名誉教授。

一高時代の勉強

1 かつて駒場の地にあった旧制第一高等学校の通称。

——一高^{いちこう}¹には何年からいらっしゃったんですか？

僕は昭和17年に入って、戦争のため卒業が繰り上げになって、3年間で2年半になったんですよ。だから僕は19年の10月には東大の法学部に入っていたわけですよ。僕の前から2年半になったんじゃないかな。

——一高のカリキュラムについて教えてください。

一高自体は、どういうカリキュラムかって言うと、元来は語学しかやらない所なんです。あとは自分で読めてことですよ。

僕の理解ではやっぱり一高のプリンシプルは自律（オートノミー）だと思うんですよ。だから自分が勉強したりなんかするために、語学をやっておくと。これは、ドイツ語ならドイツ語、フランス語ならフランス語をやって、自分たちで文学でも哲学でも読めという趣旨なんですよ。

だからこのカリキュラムを端的に言うなら、語学だけ。ただし2年ぐらいたつと、それだけやっていますから、文学や哲学は原書で読めるようになります。授業でも2年になるともうゲーテなんかやるんですから。

自分たちの勉強っていうのは自分でやる。そして教養についていえば教養エリート主義なんですよ。当時のヨーロッパ近代社会の教養っていうのは古典主義なんですよ。だからここでもですね、古典を読まなきゃいかんのですよ。古典の方は語学によって違うんです。フランス語の人はフランス語の本、ドイツ語の人はドイツ語の文学や哲学の本を読むといった具合です。

なんか強られるわけじゃないんだよ、学校とかに。ただ寮に入るとなんか読まなきゃいけない雰囲気になるわけね（笑）。さもないと軽蔑されるわけじゃない、話についていけないわけだから。

——そうですね。

僕らのころはいわゆる浪人が普通だったでしょ。僕らのクラスに浪7とか浪8がいるわけですから。その人たちは物事を深く知っているような顔をしているわけですよ（笑）。

——なるほど（笑）。

で僕は四修^{よんしゅう}²なんですよ。だから一番若造で軽蔑されてるわけ。そうするとますますね、これはいかんという風になって、一生懸命みんなが読むようなものを、買ってきて読むわけ。

でも読んでも分からないんだよ（笑）。

——身になったとかではないんですか？

2 旧制中学校（5年制）を4年で修了すること。

身にならないんですね (笑)。哲学とか、大作の文学とかっていうのはですね、読まなきゃいけないから読んでるんだけど、頭からどっか飛んでっちゃうんですよ。で、僕はそれでいいと思うんです、正直なところ。

若人の教養とは

要するに、自律した判断で選んだってことですよ。それで、わかんないわけでしょ。いまわかんないことがあっても、今度はわかんないなりに、わかる方へ自分なりに選んでいくわけですよ。

教養というものは、なんかこう一種の旅だと思うんですよ。自分で主体的に選んで、わからない。しかしそこで全部わかるなんてどうかしてるんで。自分でやって選択してるから、選択していくうちに自分に合うものがだんだんわかって行く。いまだって、自分で読んだものだって、全部理解しているわけではないですから。だからまたしばらく経ってから読むと、ぜんぜん違う読み方ができるわけですから。

僕にとって一高時代ってというのは、なんかそういう自分の知的な形成の入り口だったと思うの。内容じゃないの。プロセスなの。わかんないって言って選んでいく、永遠のプロセス、未完のプロセスだと思うんですよ。だから僕はいま 83 歳になるんですけど、いまでもこのプロセスを続けているわけですね。そういうもんだと思います。なにかを決めて、こういうもの読みなさいっていうのじゃないと思うんですよ。

教養科目と専門科目

どの程度専門科目を東大の前半期間のなかに持ち込むか、っていうことはいつでも学内で審議の対象になってました。その妥協案として、第四学期に中心科目を出して、重要なこと、基礎的なことはその第四学期で済ましてきてもらおうという風に妥協するんですよ。でもね、ほっとくとだんだんね、下のほうまでおりて行っちゃうんですよ。

でも、当時の先生たちは、やっぱりそれはまずいと考えていた。要するに一般の教養的な社会知識、人間としての智慧 *wisdom* を持ってないで、専門に入ると非常に特化しちゃって、まずいんだと。だから 2 年間はこっちの駒場に任せて、3 年間本郷っていう、5 年制にしようっていう案があったんですよ。

——へえー！

これはかなり有力だったんです。実行されそうな形になっていた。法学部の中では構想はほぼ固まっていたんです。僕が 50 代ぐらいのときじゃなかったかな。

でもちょっとエゴイズムなんですね。東大だけ 5 年制やったらどうなるかってことなんです。実現可能性も乏しいですしね。東大だけエリートだってことになっちゃってね。

この頃は専門科目が大きくなってきちゃってるしょ。

——文一は第三学期から専門科目がはいりますね。

そうでしょ。三学期から入るようになってしまう。だんだんそうになっていったんだけど、元来は先生たちは旧制高校の出身者だから一種の哲学があるんですよ、あんまり専門科目が早くから入らない方がいいっていう。

今は、法科大学院ができて、要するに専門はそっち行ってやりゃあいいんだというこ

とになりつつ。4年間はりべラル・アーツ的でいいじゃないかっていう議論はあるんですよ。だから逆に今度はあまり踏み込めないんじゃないですか（笑）。でも僕は4年間りべラル・アーツ、より正確に言えば、現代社会の多元化に適応した、やや専門化した学部制でいいと思うなあ。

——へえー。

法学部出た人とそれ以外の学部出た人が法科大学院に行くと、片一方は2年で、もう片方は3年っていうことになってますね。

——そうですね。

アメリカだったらもっとはっきりしていて、日本学やっている人が、ボンと法科大学院やビジネススクールに行ったりするわけで。それが元来の趣旨なんじゃないですか今度の法科大学院の。

進学振り分けと大学院の拡充

——進振りに対する所感をうかがいたいです。今回東大の教養学部生にアンケートをたくさんとったんですが、進学振り分けに対する不満が膨大なことになってしまって。教養学部の自由が失われているっていう感覚があるんですよ。進振りのための勉強に汲々として…、旧制で言ったら、一高で受験勉強してる感じなんです。本末転倒ではないかと。

じゃあ全部やめちゃえば。東大に入ってから席次競争ほどあほらしいものはないね。

——ですよ（笑）。僕たちの中でも共通意見なんです。行きたいところに行ければいい。

しかし全く自由にしようと言ったって、本郷学部側が受けないでしょうね。

僕も名案ないなあ。一つ言えるのは、入る前からある程度決めておいた方がいいですね。

今は法律なんかそうなっているけど、ほかの学部でびっちりやって、それから大学院に来たっていいんですよ。大学院制度が確立してくれば、だんだんそうなりますよ。

先生達も「大学院教授」になって、「学部教授」とはいわない時代になっているのだからね。

だから、大学院がしっかりしてくれば、大学は4年間直接就職とは関係なく、自由なところでやって、自分の好きなところやって、それから大学院に移ればいいわけじゃない。今移行中なんです。

——ということは将来的に東大が向かうべき道としては、大学院を拡充して、4年間りべラル・アーツをできるようにするというで。

方向としては、それが一番いいと思いますね。社会が複雑化して、その全貌を把握することが難しくなっているから。勉学はより多面的で、また多くの時間が必要になっていますからね。

Citizen としての教養

政治学者の立場から言うとね、6・3・3・4制の4の以前の6・3・3のところでは、イギリスみたいに、citizen教育みたいなものをやるべきだと思いますね。今の日本は社会科になっちゃうわけじゃない。愛国心を養成するとか。イギリスでの2002年のブレア改

革では、中学校と高校で citizenship っていう科目を作ったんです。これが大切なんですよ。市民としての教養ですよ。

— ということをやるんですか。

citizen として何をしたらいいか。例えば僕が言った自律性を尊べとか、市民的公共性をつくるとか、他者を尊重せよとか、あるいは権力に対しても批判力を持てとか。そういうことを教えたいんですね。

僕はやっぱり教養っていうものの原点は、やっぱり citizenship にあると思うな。非常に極端化して言えば。教養っていうのは基本は citizenship じゃないですか。エリート主義の教養なんて言うのは、今はもう流行らないですね。

citizenship っていうのは、市民権とか、権利と義務という風に訳しているけれど、だんだん最近では変わってきて、行動としての citizenship っていう風になってきているんですよ。status としての citizenship じゃないんですよ。行動者としての citizenship なんです。そのさい、市民的徳 civic virtue を持つことが必要になる。そういう風にだんだん発展してきてるわけです。で、そういう人を育てるのが、citizenship で、僕は教養っていうのは高度な citizenship だと思っています。

問題に直面した時に、人間としての総合的判断力ができるための知恵を養うということですね。

《旧制高等学校のカリキュラム》

大正末年における高等学校の1週間当たりの授業時間数を以下に示す。

文科

		修身	国語漢文	英語	独語	歴史学	地理学	哲学概論	論理学/心理学	経済学/法制学	数学	自然科学	体操
第一学年	甲	実践道徳1	6	9	4	日本史3	2	-	-	-	3	生物学/地質学2	3
	乙	実践道徳1	6	3	11	日本史3	2	-	-	-	3	生物学/地質学2	3
第二学年	甲	国民道徳1	5	9	4	東洋史/西洋史5	-	-	論理学2	2	-	物理学/化学3	3
	乙	国民道徳1	5	3	10	東洋史/西洋史5	-	-	論理学2	2	-	物理学/化学3	3
第三学年	甲	倫理学1	5	9	4	西洋史4	-	3	心理学2	2	-	-	3
	乙	倫理学1	5	3	10	西洋史4	-	3	心理学2	2	-	-	3

理科

		修身	国語漢文	英語	独語	数学	物理学	化学	動物学/植物学	地質学/鉱物学	心理学	経済学/法制学	図学	体操
第一学年	甲	実践道徳1	4	8	4	4	-	-	植物学2	2	-	2	2	3
	乙	実践道徳1	4	3	10	4	-	-	植物学2	2	-	2	2	3
第二学年	甲	国民道徳1	2	6	4	4	3	3	動物学2	-	2	-	2	3
	乙	国民道徳1	2	3	9	4	3	3	動物学2	-	2	-	2	3
第一学年	甲	倫理学1	-	6	4	4	3/実験2/初等力学2	3/実験2	2	-	-	-	2	3
	乙	倫理学1	-	3	9	9	3/実験2/初等力学2	3/実験2	2	-	-	-	2	3

2 水高満氏

(NHK プロデューサー)

現在、NHK で放送中の「爆問学問 爆笑問題のニッポンの教養」。漫才師である爆笑問題の二人が、様々な分野の研究者とトークバトルを行う「知の異種格闘技」である。「教養」というものにテレビ番組で迫っているこの番組に興味を持った「教養と教育」班は、そのチーフ・プロデューサーである水高満氏にインタビューを行った。番組についての詳細は番組の公式 Web サイト (<http://www.nhk.or.jp/bakumon/>) を参照されたい。

——本日はよろしくお願ひします。

番組は見たことありますか？

——もちろん。大ファンなんですよ。一番最初の東大スペシャルの頃から見てます。最初はなんで東大スペシャルをやろうと思ったんですか？

東大スペシャルというか、本当は一回限りの予定だったんですよ。東大の持つてゐる知識とか、研究のアーカイブって凄いものがあるじゃないですか。だけどもあんまり世に出てこないでしょ。だから、東大と NHK が組んで一般の人が見てもわかる感じで、東大の凄さを見せる番組をやれないかなって。知識の宝庫と言われてるところがあるじゃないですか、国会図書館とか NASA とか、色々ありますよね。東大も当然そうなんだけど、外の人間から見たら何をやってるかわからない。もしかしたら日々、世の中を変えるような研究をしてる理系の人とかいるのに、なんにもわからない。ノーベル賞とかをとったときだけわかったりする。なので、もともとは東大が持つてゐる知を NHK と組んで出せないかな、というのが大本にあったんですよ。それで出し方として、東大の持つてゐる力を引き出すために誰が一番良いかなと考えて、爆笑問題を選んだんです。爆笑問題っていう異分子を放り込んで、しかも太田さんなんか特にそうだけど、ものすごい知識欲の塊でしょ (笑)。子供の頃によく、「何で空って青いんだろう？」とか「何で花が咲いたら枯れるの？」、「何で私って生きてるの？」とか聞くじゃないですか。それをずっとやめなかった人っていうイメージがあるんです、太田さんには。実際、東大に行ってる人とか研究してる人でも、その頃の疑問に答えられるかって言ったら、答えられなかったりするんですよ。だから、本当に無垢で知識欲旺盛、そして毒舌な芸能人を、権威の象徴というか日本の最高学府に、敵としては充分な東大に、ぶつけたら良いなと思って、その話を東大に持っていったんです。そうしたら東京大学は教授会とか開いて大変なことになったわけ。

——そうなんですか？

そうなんです。大げさにいえば、東大という場が開かれた教養の場なのかを試されることでもありますから。でも、小林康夫教授という、受けて立とうとおっしゃってくれる方がいて、しかもテレビ番組として設定した「いかにも」な場ではなく、「新入生歓迎シンポジウム」として大講義室でやりましょう、という話になっていった。つまり、本気だったということですね。

趣旨説明として、一過性のバラエティーで終わらせるつもりは無いって言ったんですよ。当然僕も、東大の駒場のほうの偉い教授達の会議に出まして、趣旨説明をしました。

太田さんが質問攻めにして教授がそれに答えるというのでは無く、異種格闘技です、っていう話をしたんですよ。爆笑問題さんだって、日本のメディア界でトップじゃないですか、20年漫才をやってきたスキル、話術で何かを聞くから、それに対して東大がどう答えるのか、がっぷり四つで対話したいと。東大の先生に一方的に教を乞おうとは思っていないって話したんです。太田さんもそういう気持ちで来るからそれを受け止めてくれますか、っていう話をしたら、東大も意外と受けてくれました。懐が深い！

——大学教授との収録のときは、さわりだけ与えてやってもらうんですか？

収録はそうですよ。何にもやってないと思われると思われただけで（笑）。もちろん教授の研究の核っていうのはどんなに笑いがあっても伝えなきゃいけないと思っているし、ご出演していただいた教授に失礼なんでね、ディレクターはものすごい取材しますよ。わからないなりにね、めちゃくちゃ勉強してもらいます。そうしないと、何が肝かわからないんだよね。だからそれはやります。でも爆笑問題の二人に自分が調べたことを全部説明しちゃったら、ああいう風には撮れないんですよ。つまり異分野を背負っている大人の人間同士が本気で話すドキュメンタリーとして、という意味ですけど。先生の話の事前にかくさん聞いて、爆笑さんには話が転がるであろうポイントを三つしか与えない、っていうようなやり方でやってます。

——本もたくさん出てるじゃないですか。作ってる方に聞くのもアレなんですけど、何でこんなに受けてるんだと思われませんか？

僕らの中で自負しているのは、やっていることが視聴率をとる番組じゃないでしょ。来週は分子生物学、とか言ってるんだから（笑）。哲学とか語っちゃうし。あとタイトルにも関係するんだけど、「教養」って敢えてつけてるんですよ。教養ってほとんど死語でしょ。今時教養って。だけどすごい宝が詰まっているものを、太田さんと田中さんとスタッフで開けて、見せてるからじゃないですかね。それとやっぱりキャラもあるよね。その道で世界レベルまで行った人って、失礼な言い方ですけど、キャラが良いんですよ、人が魅力的なんですよ。それを凄く感じて、僕らがこの人に出てほしいと思う人、つまり研究が面白いとか文章が凄くっていう本当に一流の突き抜けてる人は、お会いすると大抵個性的なんです。

——いま「教養という言葉は死語だ」という言葉がでました。この番組では「教養」というのをどんな感じで捉えているのですか？

もともと、番組をやるからには企画を通さなきゃいけないわけで、「なんで教養とは大切か」というのを問わないとテレビ番組にはなりませんよね、納得しないと。そのときに言っていて、また番組をずっとやってきて各教授と話してみて、なんとなくこういうことかなと思っているのは、教養って少なくとも知識ではないよね。知識をいくら詰めても、評論家にはなれても教養人にはなれないでしょう。つまり途中で止まってしまう人は「知識人」なのかもしれない。「違う目線」とか「違う世界観」とか「他者」をいつでも見られるようなフットワークを持って、それをひたすらやり続けていると自分なりの目線というのを獲得してくるでしょ。それが「教養」なんじゃないか、と思います。番組ではそれを模索しているという感じを持っていますよね。だから、異なる分野をぶつけて火花が散ったところをパッケージしたいなと思っているんです。この番組に出てくる先生って、一種のオタクでもあると思うんですけど、やっぱり話を聞いていくとすごい自分の人生観を持っていらっしやるんですよ。だからね、「東大の教養」の後で、太田さんが書いてくれた文章でも似たようなことを言っていて、例えば、立川談志にとっての落語、モーツァルトに

とっての音楽、ピカソにとっての絵というのは、単なる落語家、音楽家、画家として凄いのではなくて、何かもっと別のものを発しているじゃない。つまり、彼は「芸がある」という言い方をするんですけど。教養には芸が必要で、芸がないのは教養とは言いたくないという。ちょっと抽象的ですけどそういう感じですね。

——教養は必要だっているスタンスなんですか？

うーん、必要かどうかはその人次第かも。僕は間違いなく、あった方が人生楽しいと思うけど。

——僕もそう思います。この番組は視聴者に対するメッセージとしてはどのようなことを？

いま教養って言葉を聞いたら、思う教養のイメージってあるでしょ。それじゃない新しい教養の形っていうのを感じてもらいたいってというのが一番なの。

——カビ臭い感じがしますもんね。

そうそう。難しそうとかさ。そういうことじゃないよね。その人その人にとっての教養っていうのはあってね、だけどそれって、たとえがうまくできないんだけど。たとえばみなさん今、学生で、おいしいものいっぱい食べてますか？たとえばフランス料理の最高級のとか、食べてないでしょ？でも何か食べた時おいしいって感じられるわけで。各段階の教養っていうのは多分あると思う。僕らは、世界レベルでの教養がどのぐらいの考えを人間にもたらすのかっていうのを見せていければと思っている。やっぱり一番おいしいところを知らなきゃ、自分がどのレベルか分からないじゃない。別に教養を押し売りしているわけじゃない。楽しんでみてもらって、そういうヒントになればってぐらいのことですよ。テレビ番組ですからね、革命起こそうとしているわけじゃないから。

——でも若干起こってると思うんですけど、どうなんですかね。東大生にアンケートとると、教養人に太田さんが入りますね。東京大学の学生に今回アンケートをしたんですね。その中で教養のある人は誰かあげてくれてやったら、立花先生の名前が多いんですけど、あとは太田さんの名前もたくさん上がって。

本当に!? 立花先生とどっちが多いの？

——立花先生の方が多いですね。まあ、それは「立花隆ゼミナール」って書いてありますからね、相当バイアスはかかっているとしますが（笑）。

——最後にテレビの話なんですけど、いままで教養っていうと本であつたりとか新聞であつたりとかそういうメディアが注目されがちだったじゃないですか。で、テレビと教養っていうのがちっと組み合わせているのはすごく斬新な気がするんですけど、しかもそれがめちゃくちゃ上手くいっていますよね。それはどう思いますか？

一億総白痴化って言われたときにさ、テレビが元凶というか悪者だったでしょ？でも、「一億総白痴化するほどの伝播力」っていうのがあるメディアってことなんですよ、逆手に取ると。あと、これ太田さんもよく話しますが、一番いいのはテレビってあんまり差別しないんですよ。つまり、AV女優と東大教授と漫才師が出て、どれがステータスとかかで関係なく、見ている人は「この先生、言ってることは偉そうだけど中身はなさそうだな」とか、「このAV女優はすごく生きることを考えてるな」とかさ。もっと言えば、大学教授の寝癖を見て「この人だらしない人なんじゃないか」と思って、話なんか聞いてないかもしれないじゃない。そういう意味で、人間がすごく出ちゃう場なんです。そういう場で教養とは何かやってやるのは、伝播力とあいまってね、なんとなくひろがるんじゃないかというところがあるんですよ。

——なるほど。

ただし、僕はテレビが一番すごいとは思ってないから、ネット展開とかも含めてやりたいなと思ってるんですけどね。

——今までのイメージとして教育番組って言ったら「さわやか3組」とか理科の実験番組だったり、大学の授業のレベルのものが全然なかったんです。僕は哲学とか好きだから言うんですけど、そういうレベルの番組っていうのをもっと教育テレビとかが作ったりしないんですかね？

これは総合テレビでやってるでしょ？ ニッポンの教養って取って総合の夜で勝負してるってところがあるんですよ。研究だから教育っていうのはちょっと避けて、要するにもっと開けたというか。マジで勝負するときに、教養で勝負するの!？ っていうところがあるじゃないですか。裏であいのりとかスマップやってるのに（笑）。他にもお笑いとか、セクシーものとか。なのにこっちは解剖学で勝負してるんですよ。そういう面白みは総合のほうがあるよね。教育のほうでやるとまた違う方向になっちゃうかもなあ。いろんなイメージが教育テレビについちゃってるからね。でも変わっていくとはおもいますよ。というか変わらざるをえないんじゃない？ で、ライバルはネットですからね。

——結構ネットを意識してるんですか？

してますしてます、もちろん。違うメディアとは思ってるけども。まだテレビのほうがきつと見られてると思うけど、もうすぐだと思ってるんで。

——今ウェブがすごいことになってますからね。今回の講演の冊子にも本とウェブの闘いみたいな話が出てきます。

ただ、テレビ制作の技術っていうのがまだネットの映像の送り手にまだあまりないからいいんだけど、CMとかネット広告とかはメディア特性を利用していろいろ面白いのがあるんですよ。例えば車のCMなんかでも自分が買おうと思ってる車の内装とかのパーツをネットで選んでいくわけ。選び終わると、美女が出てきて、一緒にドライブしましょうって言って、乗った感じがずっと見れてっていう。そういうやつは、テレビじゃなかなかできないよね。爆問学問もネットでの展開はありえるよね。番組の参考文献がずらりと並ぶネット図書館とか、例えば人間が今作ってる脳の最前線や最速の電気自動車、万能細胞とかロボットがずらりと並ぶバーチャルな世界研究室を作っちゃうとかさ。まあ、思いつきですけど。

——いよいよとんでもないことに。これからの爆問学問が本当に楽しみです。今日はありがとうございました。

